

BONCHI BOOKSTORE



ひとりでに、持続可能な地域や社会が生まれる場所。

TAKE FREE

時代を読み解く 500冊 第③回

立ち止まり、時空を超える

診断や治療に悩む時、あの先生ならどう子供に語りかけお母さんに話を聞かすと、かつての恩師を思う。仕事でも日常生活でも、自分では自由にふるまっているつもりでも、多くの人の言葉に支えられて生きている。見て、感じ、思うこともすべて、人類の、あるいはそれ以前の生命進化に支えられてのこと。疑問の答えはネット検索しても得られない。最新情報が最良のヒントとは限らない。今、悩み考えることはたいてい既に誰かが経験したこと。著し残しておいてくれたものを、時空を超えて探しだし、耳を傾ける。読書の楽しみは、今、会えない人とも話し合えること。そうして最近、読み返した本を紹介したい。



富和 清隆

東大寺福祉療育病院院長
奈良親子レスパイトハウス代表
重度障害の子供や大人の傍にいと、能力と豊かさは別だと知る。独り強く遅くあることより、人を思い人に思われることが大事と気づく。ともに在ることを大切に地域、世の中であって欲しいと願う。1949年生まれ。



星の王子さま

著 / サン＝テグジュペリ 岩波書店
訳 / 内藤濯

1943年英語訳が初版。44年著者は戦線で飛行機とともに消息を絶つ。46年母国フランスで出版後、世界中で翻訳され、多くの人に読まれ続けている。王子さまは、キツネに出会って、飼いならされる（特別な存在になる）こと、かんじんなことは目に見えないことを教えられる。その美しい情景と言葉が、いつになっても忘れられない、子供の、そして大人のための物語。



私の古寺巡礼

著 / 白洲正子 講談社

講談社文芸文庫の『白洲正子の世界』全12冊の中の1冊。古寺巡礼といえば和辻哲郎が思い浮かぶが、哲学者、倫理学者とは違った、子供の時から本物だけを目にしてきた女流作家による巡礼随筆集。歴史を学ぶというより日本の美の極みを彼女の目を通して味わうことができる。こっそり奈良のかくれ里を訪ねたくなる。今、大事にしておきたいものは何かを気付かせてくれる本。



街道をゆく 24 近江散歩、奈良散歩

著 / 司馬遼太郎 朝日新聞出版

新聞記者であった司馬遼太郎が、自分で歩き、人に会い、自分の眼で見て、考え、確かめて書いたことがよくわかる。奈良散歩はほとんどが、東大寺、それも修二会にかかわることである。上司海雲さんには私も高校時代にお目にかかったことがある。今はその、孫にあたる方々が東大寺を支えておられるが、修二会も、そして境界の景色もほとんど変わらないのがうれしい。



新装版 考えるヒント

著 / 小林秀雄 文藝春秋

小林秀雄は受験勉強で読まれたこともあり、学生時代は難解な文章、保守的な観点に抵抗を感じた。この本は、昭和34年から39年の間の雑誌や新聞に掲載されたエッセイを集めたものだが今も新鮮、エスプリに富む。気楽に、しかし、考えるとはどのようなことかをしっかりと教えてくれる。



自省録

著 / マルクス・アウレリウス 岩波書店
訳 / 神谷美恵子

著者はバクス・ロマーナ（ローマの平和）五賢帝の一人。版図が最大である一方、北境民族の叛乱、災害など多事多難な時代を「叡智と仁徳をもって治めた」（ギボン）とされる。ストア哲学に傾倒した。「生きがいについて」の著者がなぜ本書を翻訳したか、大学生の私が興味を持って読んだ本。以来、時々好きな章を読み直す。



パウダ [佛教]

著 / 中村元、三枝充恵 講談社

仏教が始まる歴史的背景から日本での展開までを明解に解説する学術的入門書。文献、索引とも充実し、難解な仏教用語も理解しやすい。「宗教」「仏教」という日本語について短く章立てして論じている。書名をパウダとした理由もうなずける。最終章「經典読誦のすすめ」ではお経の読誦実践を誘う。仏教を身近に感じる1冊。



モモ

著・イラスト / ミハエル・エンデ 岩波書店
訳 / 大島かおり

子供の頃はあれほど長かった一日、一年がこの頃はあっという間に過ぎる。子供までが「時間が無い」と口にする。労働時間の削減、仕事の効率を追求して得たものを人は何に費やすのか？苦勞して得たお金と時間は、結局「時間どろぼう」に盗まれるはめに。経済の成り行きばかりに人々が関心を持つ社会。いつも忙しい、時間が無いと感じている人にこそ、時間を工面し読んでほしい。



スモールイズ ビューティフル

著 / EF シューマッハー 講談社
訳 / 小島慶三、酒井懋

佐伯啓思のエッセイで、私は仏教経済学という言葉を知った。仏教は、足ることを知る、欲にとられないことを諭す。今盛んに言われている循環型社会、人と人、人と環境との共存は 70 年代仏教経済学で説かれたテーマでもある。もともとケインズに師事し戦後のヨーロッパ復興に携わる一方、アジアの発展支援の中で仏教社会に出会い、人間中心の経済学を提唱した。



大乘とは何か

著 / 三枝充恵 筑摩書房

19 歳の 8 月、著者が東大寺法華堂不空羅索観音に見入っていたところを僧に声をかけられた経験から始め、広大な大乘の世界を巡り思索、研究してきた跡を語る。終戦で学徒兵から大学に戻った著者は法学部から文学部、哲学、宗教学、印度哲学に移る。自身の学びをもとに、哲学としての仏教、キリスト教との対比などを一般の者に分かりやすく語りかける。



いつもいいことさがし 2

著 / 細谷亮太 暮しの手帖社

1997 年から 23 年間、隔月刊『暮らしの手帖』の「いつもいいことさがし」のコーナーに連載されたエッセイ集の第 2 巻。著者は小児血液がん専門医として聖路加国際病院に勤務する傍ら、自分の生い立ちを振り返りながら子供や親御さんたちへの思いを併人、エッセイストとして言葉にしてきた。3 巻のあとがきでは、私と共通の恩師、山本高治郎先生が何度も回診で「アプリヴォワゼ」（＝「飼いならす」星の王子さま参照）に触れたことを述べている。



出生前診断 受ける受けない誰が決めるの？

著 / 山中美智子、玉井真理子 他 生活書院

誰もが生まれてくる子が元気であってほしいと願う。その願いは容易に、元気でない子は産みたくない、元気な子だけを産むという主張に変わる。リスクを減らす技術があれば利用したいと思う。リスクは、しかし、産んだ後でも付きまとう。そもそも、子供の病気や障害はリスクなのか？ 生殖技術の進歩により、かえって子供を産み、親になることに、これまでとは違う覚悟が必要とされるようになった。



経済成長主義への訣別

著 / 佐伯啓思 新潮選書

雑誌『新潮 45』の連載「反・幸福論」を私はいつも楽しみにしていた。このシリーズはすでに新書版で何冊か出版されているが、本書は 2016 年から 2017 年の連載を加筆したもの。経済が成長すれば人々は幸せになるのか？ 50 年前、100 年前の生活は不幸だったのか？ 得ることで失うものはなかったか？ 「ふつうの人」が「ふつうに生を送る」あたりまえの幸せについて奈良市出身、私と同年代の社会思想家が分かりやすく語る。



君あり、故に我あり 依存の宣言

著 / サティシュ・クマール 講談社
訳 / 尾関修、尾関沢人

我思う故に我在り。近代科学はこの言葉を出発に始まった。そして、私たちは、自立、自尊を最大価値とし、医療、福祉においても目標とする。しかし、実際は相互依存の上に生きている。著者は、仏教と同じ頃インドに始まったジャイナ教の徒。もともと、東洋には、人だけでなく動植物、そして命あるものもないものも時間空間を共有するという感覚がある。現代社会を救う共存、依存の思想。



福祉の哲学とは何か

著 / 広井良典 ミネルヴァ書房

日本の福祉制度の背景を知りたいと思っていた時、たまたま書店で本書に出会った。未来への膨大な借金を抱える国にあって将来の福祉はどうなるのか？ 漠然とした未来への不安を誰もが感じる。そもそも、人が助け合うことはどのようなことか？ 公助、共助という枠組みで世界と日本の福祉の歴史を振り返り解決の糸口を探る。人類史というマクロな視点から人の幸福、福祉、そして未来について論じる意欲的な本。



脳がつくる倫理

著 / パトリシア・S. チャーチランド 訳 / 信原幸弘

道徳や倫理は人間に固有なものか？ 利他的行動や共感ヒトに限ったことか？ 哲学者が脳科学の成果を踏まえて倫理の本質に迫る。多く人は、生物化学に基づいて道徳の基盤を理解しようとする。しかし、人の愛着、愛情、社会的行動を支えるホルモンのオキシトシンが、哺乳類の進化を通じて形をかえずヒトに伝えられてきたことを知る小児科医には、説得性のある主張に思える。



奈良県奈良市橋本町3-1
TEL: 0742-27-1111
MAIL: nara.tomosu@gmail.com
https://bonchi.fun/